

信楽 まちなか芸術祭

54日間の軌跡

10月1日から11月23日まで、信楽を舞台に信楽陶芸トリエンナーレ「信楽まちなか芸術祭」が開催されました。

5つの会場を中心に、陶都・信楽の魅力を最大限に活かした展示やイベントがあちこちで展開され、まち全体がアートであふれました。54日間の期間中、当初想定していた20万人を上回る23万6,933人が来場し、焼き物のまちなかを感じていただきました。

見て、聞いて、触れて、歩いて全身で感じていただいた信楽まちなか芸術祭。今回は、それぞれの会場の模様を写真で振り返ります。

まちなか 会場

多彩なアートイベントで まちの魅力 広く発信

10月1日に、陶芸の森で地場産業関係者らが出席し、オープニングセレモニーが行われ、同時に、多彩なアートイベントも各会場で行われました。

期間中、いつ訪れても楽しんでいただけるよう、5つの地域の特性を活かして趣向を凝らしたイベントを開催。古い窯跡や昔ながらの民家などが残る焼き物の里の風景や、未来を担う若手作家たちのモダンなアート作品が溶け合う信楽のまちを、市内外に広く発信しました。

ボランティアスタッフによるFM放送局「FMしがらぎ」がリアルタイムの情報を発信するなど、地元の皆さん手づくりのおもてなしも芸術祭を盛り上げ、訪れる人を温かく迎えました。

最終日にはクローシングセレモニーが行われ、54日間をスライドで振り返りました。信楽陶芸トリエンナーレ実行委員会会長の中嶋市長が、会期を無事に終えたことを報告し、関係者にお礼を述べました。



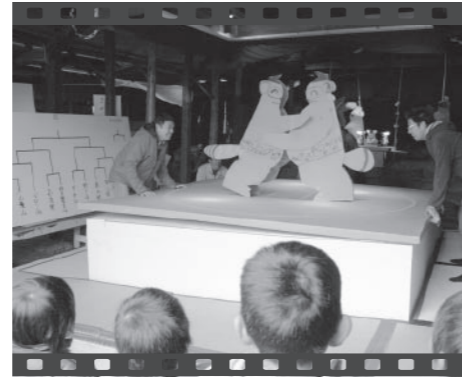
まちなかに埋もれている信楽の「美」を発見し、そこに手を加えた「まちなみまるごとアート化活動」。窯元散策路にあるポケットパークは、碁盤の目を活かして巨大将棋&オセロを楽しむスペースとなりました。

各窯元に蓄積された懐かしい製品にスポットをあてた「歴史展」では、かつて全国シェアの約8割を占めていた信楽焼の火鉢などをご覧いただきました。

まちなか散策はここからスタート。信楽支所隣のインフォメーションでは、スタッフがその日の見どころを案内しました。各会場の多彩なイベントが掲載された公式周遊ガイドもここで配布されました。



信楽伝統産業会館では現役陶芸作家約50人の作品を展示する「信楽の今」陶芸展が開催されました。信楽焼独自の伝統を活かした茶陶から新しい造形に挑戦するオブジェ作品まで、果敢に挑戦する陶芸作品の実像をご覧いただきました。無形文化財保持者の作品も一堂に展示されました。



黒壁国技館では「狸相撲信楽場所」を開催。ダンボールでできた等身大の狸力士が土俵の上で戦いました。11月23日の千秋祭では王座決定戦があり、地元の窯元らが熱戦を繰り広げました。

▼窯元が多く集まる長野地区。24軒の窯元で、普段見られない日常の制作風景を楽しむことができる「工房見学」では、作り手とコミュニケーションしながら信楽焼の魅力が再発見していただきました。



商店街の空き店舗を活用し、若手陶芸家の展示会「信楽新世代陶芸展」を開催しました。独自の方法で生み出した作品の数々で信楽の「これから」を感じていただくことができました。

木で作った型枠に土を入れ、締め固め、さらに土を入れ、締め固め...を繰り返し、土の壁を作る、押し寿司のような「版築」工法。焼き物のもととなる「土」と「水」の不思議な反応を利用して、期間中、まちの皆さんと小屋を制作しました。



「また来たい」という声に 信楽焼ブランドの復活を確信

信楽陶芸トリエンナーレ実行委員会会長
甲賀市長 中嶋武嗣

低迷する信楽焼を当市の伝統ある地場産業として活路を見出せるよう、平成18年12月に滋賀県版経済振興特区の認定を受け、その集大成として計画しました「信楽まちなか芸術祭」も、23万人を超える皆様にご来場いただき、54日間の会期を無事に終えることができました。計画段階からご尽力いただきました関係者の皆様方、ボランティアとして献身的にご活躍いただきました皆様のお力の賜であり、心から感謝申し上げます。

今回の芸術祭では、大きく2つの柱を立てて臨みました。

その一つは、強い危機管理意識を持続させることでした。事故を防ぎ、あるいは最小限に食い止めるため、あらゆる想定に対応策を講じてまいりました。

二つ目には、飾り気のない、いつもの「信楽」を発信することになりました。スタッフや地元の方々の人間味が、訪れる方の旅情を満たし、「また来てみたい」というお声を多くいただいたことは、何よりであると思います。来場者のお一人おひとりが、いつまでもよい思い出として残していただき、再び信楽にお越しいただくことにより、必ずや信楽焼ブランドの復活と地域経済の伸張は果たし得ることができると確信しております。

この芸術祭がもたらした効果の分析にはしばらく時間を要しますが、地域を挙げて力を結集することの素晴らしさは明白であります。期間中に教訓として得たものをしっかりと検証し、トリエンナーレとして3年後には、さらに充実した芸術祭に育てていただくことを願っております。



国際姉妹都市の韓国・利川市は信楽と同じく焼き物の産地です。信楽伝統産業会館で行われた「韓国利川市交流展」では、利川市の名工が制作した作品を紹介、利川市の金昌奎副市長も視察されました。



信楽まちなか芸術祭のPR大使「匠ボン山先生」と「ぼんぼちゃん」がいるんな所に出没。愛嬌を振りまく2人は子どもにも大人にも大人気で、記念撮影にひっぱりだこでした。



11月14日には来場者が当初目標としていた20万人に達しました。20万人目にあたる静岡市の宮城島靖博さん・八重子さん夫妻に中嶋市長から記念品が贈られました。



年中活躍する信楽焼のためぎを1年に1日だけ休ませてあげる「ためぎの休日・ためぎ休むでえ〜」。今年は11月6日から8日の3日間に行事が行われました。ためぎたちは、温泉に入ったり、市内の園児が作ったアイマスクをつけて休息するなどして、ゆっくり過ごしました。



聖武天皇が造営した紫香楽宮。宮町公民館で行われた「紫香楽宮天平ロマン展」では、当時の風景を陶人形で表現しました。また、公民館周辺に存在している朝堂跡をマリーゴールドの花で浮かび上げさせ壮大な空間を再現しました。



日本で初めて出土した万葉歌木簡や紫香楽宮の歴史を学ぶ講演会が開催されました。多くの考古学ファンが専門家の話を興味深く聞き、往時に思いをはせました。



地域の農作物や軽食を提供する「天平の地ふれあい市場」が10月16日、17日の2日間、隼人川みずべ公園で開催されました。地元の方々が温かくもてなし、訪れる人々と交流しました。

会を中心に問題点、反省点等を洗い出し、イベントの効果などの検証を進め、今後の参考にしていきたいと考えています。
時代とともに新しい造形が生まれ、進化し続ける信楽焼。今回の経験を3年後の開催に活かして、市民中心の手づくりイベントとしてさらに大きく飛躍できるように、地元の方々とともに取り組みを進めていきます。

紫香楽宮 会場

▲古窯で生産された代表作品を中心に、各地で生産された優品をあわせて約170点を展示。生活必需品であった壺や甕からは力強さと素朴さが伝わってきました。初日には六古窯産地の各首長も視察されました。



▲最終日の11月23日には朝宮小学校グラウンドで「朝宮茶まつり」が開催されました。体育館では児童による発表や地区の文化祭も行われました。

陶芸の森 会場



「日本六古窯サミットin甲賀」の交流事業として、信楽・備前・丹波・越前・瀬戸・常滑の各首長がそれぞれの産地の粘土を使って茶碗を制作されました。これらの作品は室町・桃山時代の穴窯を再現した金山窯で焼成され、信楽産業展示館で展示されました。



10月9日から11日の3日間に太陽の広場で行われた「陶器市」。3万2千人を超える焼き物ファンが訪れ、商品を品定めしたり、店主や作家と会話を交わしたりしながらテント巡りを楽しんでいました。



「酒の器展」では近江の日本酒に適した信楽焼の酒器が提案されました。会期中の10月30日には日本酒コラムニスト藤田千恵子さんを招いて利き酒トークショーを開催しました。

▼信楽産業展示館では生活の心地よさをテーマにした「信楽ライフセラミックス展」を開催。デザイナーと窯元がコラボレーションし、日常の暮らしに新たな生活シーンを提案しました。「花のある暮らし展」「環境と暮らし展」「ピアマク展」などの企画展も人気で、リピーターも多く見られました。

書斎 浴室



イベントの効果を検証し3年後には大きく飛躍を

多くの方にご好評いただいた一方で、「道の案内表示がわかりにくいところがあった」「休憩所が少ない」「喫茶店が少ない」「もっと大きく宣伝してほしい」といった意見もありました。今後は、実行委員会や専門委員

温かいおもてなしに8割が「良い印象」
来場者アンケートより、会場からの来場が34%、県外からは66%の方にお越しいただきました。また催事別では、まちなか会場の「窯元散策」や陶芸の森会場の「ライフ・セラミックス展」の人气が高く、芸術祭の印象については、来場者の8割以上に「良い印象」というお答えをいただきました。また「まちの人やスタッフが親切で感動しました」「また来たいと思います」といった声も数多くいただき、多くの来場者に信楽焼やまちの魅力を体感していただくと思えます。



MIHO MUSEUM 会場

MIHO MUSEUMでは秋季特別展「古陶の譜 中世のやきもの一六古窯とその周辺」が開催されました。

朝宮会場



信楽町茶業協会による朝宮茶の手もみ実演と体験も来場者の関心を呼びました。試飲も好評で、多くの方に香り高い朝宮茶を味わっていただきました。



朝宮農業技術拠点施設では、「朝宮茶と信楽焼」が期間中の日曜・祝日の7日間開催されました。日本五大銘茶に数えられる朝宮茶の歴史や製造工程、信楽焼の茶器などが紹介され、お茶の文化を広く発信しました。

問い合わせ
信楽陶芸トリエンナーレ実行委員会
事務局 室